17　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

〈お茶の水女子大〉　二〇一五年度出題

　長月十三日、は月もかりぬべし、東山の鹿の声聞き（ａ）てむとて、思ふどちひ出づ。のなる家に入りて休らふほど、月は山の高く、薄曇りたり。ひは夕暮を時とすめればとて、やがておのおのうち傾くに、背きあひ物恨みたらむ様したらむも忌まはしう、月のため心苦しなど（１）かこつ人もうちまじりて、ひそかには傍ら酒も汲むめり。

　　東山ひと声もせぬさを鹿は忍びにのみや妻をふらむ　　　　　　　夢宅

　　さを鹿よ月はいたくもけにけりいづらの山に妻を恋ふらむ　　　　秋長

　今はいかにせむなど言ふ程、玄阿法師入り来たり、「あはれ、（２）宵より追ひ出でてさまよひ歩き、からくも尋ね得たるよ。さて、聞き給へ（ｂ）りや。おぼつかなし。たとひ鳴きぬとも、ここには定かには聞こゆべうも思ほえず。この近きわたりのたたずまひは、さるよすがありて、よくも我知りぬ。前なる真如堂の奥つ方、なにがしの寺こそ、山近く迫りて、やがて鹿のしとも言ふべし。これはた、知るあるじなれば、いざたまへ、伴ひぬべし。（３）夢うち覚まさむも憚る仲らひならず。つゆ心な置き給ひそ。さりとて、かかる所にはよくも尻据ゑ給ひたり」など言ひののしり、したり顔なるもいと嬉しくて、さて誘はれ行く。げに木立などものりたるに、月さやかにさしわたり、山を限り、東向きにうち晴れたる、いとあはれにおもしろく、言はむ方なし。みな前栽に降り立つに、玄阿法師うけばり、あるじぶりたるも、さる方にみやびたり。

（４）待ちわたるほど、いたづらにやは、とて、あるがままのけしきを詠むに、

　　うら枯れの草葉みながら露置きて澄む月寒し更けぬこの夜は　　　　玄阿

　さるほどに、尾上のたわめ（ｃ）るわたりより、ひと連ねにいとけぢかう鳴きすましたり。

　　澄みまさる月はあれども鹿の音をさやかに聞くぞ嬉しかりける　　　重延

また三叫び、うち返し鳴きたる、いと興ありや。

（香川景樹「東山鹿聞の道の記」による）

注　○妻乞ひ─―牡鹿が妻を求めて鳴くこと。

○さを鹿─―牡鹿。

○なにがしの寺─―実際には寺の名前を言ったものと思われるが、文章の上ではぼかして書いている。

○いざたまへ─―さあお出でください。

○前栽─―ここでは庭を指す。

○うけばり―─出しゃばって。

◎問１　傍線（１）「かこつ人」はどういう不満を述べたのか、わかりやすく説明せよ。

問２　傍線（２）（４）を必要なことばを補って現代語訳せよ。

問３　傍線（３）を現代語訳せよ。

問４　二重傍線（a）～（c）を文法的に説明せよ。

# 【解答と採点基準】

問1　Ａ妻乞いの鹿の声を聞くのは夕方がよいようなので、Ｂ月が高く上った夜中では鹿の声が聞けないのではないかと思い、Ｃ今夜が十三夜の名月であるがゆえにＤ鹿の声が聞けないのはなおさらやりきれないという不満。

Ｄがなければ全体０。

Ａ＝１／Ｂ＝１

Ｃ＝４〔「十三夜」または「名月・美しい月」のどちらかでも可。〕

Ｄ＝４〔「やりきれない」は「切ない」「つらい」などでも可。〕

問２　（２）＝Ａ夜に入って間もなくから私はあなた方を追って捜しまわり、　　Ｂやっとのことで捜しあてることができましたよ。

Ａ＝５〔「私はあなた方を」という内容の補いがなければ減点３。〕

Ｂ＝５〔「捜しあてる」という内容がなければ減点３。〕

　　　（４）＝Ａ鹿の鳴き声が聞こえるのを待ち続ける間、Ｂ虚しく時を過ごしてよいだろうか。いや無駄にするのはよくない

「鹿の鳴き声が聞こえること」という内容の補いがなければ全体０。

また、反語表現でなければ全体０。

Ａ＝５〔「～続ける」の意がなければ減点３。〕

Ｂ＝５

問３　Ａ寝ているのを起こすようなことも遠慮する間柄ではない。Ｂ少しも気がねなさるな。

Ａ＝５〔「起こす」の意がなければ０。〕

Ｂ＝５〔禁止の意を表現していなければ０。〕

問４　（ａ）＝強意の助動詞「つ」の未然形

　　　（ｂ）＝完了の助動詞「り」の終止形

　　　（ｃ）＝存続の助動詞「り」の連体形

# 【現代語訳】

　（陰暦）九月十三日（今日は十三夜の名月である）、今宵はきっと月も明るいであろう、東山の鹿の声をぜひ聞こうと思って、気の合った者どうしが誘い出た。神楽岡の後ろの方にある家に入って休息する間、月は山の高く上り、かすかに曇った。（牡鹿が妻を求めて鳴く）妻乞いは夕暮れをよい機会とするようであるので（月が高く上ったこの時間に鹿の声を聞くことができるだろうか）と思って、そのままそれぞれがちょっと不審に思っていたところ、（中に）後ろを向きあい恨み言を言うといった様子をしているのも不愉快で、（十三夜の）月ゆえに（なおさら鹿の声を聞けないのは）やりきれないなどと不満を言う人も出て来て、こっそりと傍で酒を汲んで（すでに一杯やって）いるようだ。

この東山では一声も鳴かない牡鹿は人目を避けて妻を訪ねているのであろうか。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　夢宅

　　　牡鹿よ、月は（高く上り夜も）ひどく更けてしまった。お前はどこの山で妻を思い慕っているのであろうか。 　　　　　　　　　　　　　秋長

　今はどうしたらよいだろうかなどと言ううちに、玄阿法師が入って来て、「ああ、問２（２）夜に入って間もなくから私はあなた方を追って捜しまわり、やっとのことで捜しあてることができましたよ。ところで、（鹿の声は）お聞きになりましたか。（皆さんが聞くことができたかどうか、）心配です。たとえ鳴いたとしても、ここでははっきりと聞こえるはずとも思われない。この近くのあたりの様子は、しかるべき縁があって、よく私は知っている。前にある真如堂の奥の方の、何々の寺は、山が近くに迫っていて、そのまま鹿の寝床とも言えるだろう。これまた、知っている主なので、さあお出でください、お連れしよう。（その主は）問３寝ているのを起こすようなことも遠慮する間柄ではない。少しも気がねなさるな。それにしても、このような所によく尻を据えていらっしゃった」などと大声で騒ぎ、得意顔であるのもとてもうれしくて、そのまま誘われていく。（なるほど）本当に木立なども古びている上に、月が明るく一面に射して、東山を極限として、東向きに晴れている様子は、とてもしみじみと趣深く（心も晴れ晴れとするようで）、なんとも言いようがない。みんなが庭に降り立つと、玄阿法師が出しゃばって、主人然としているのも、それ相応に優雅である。

　問２（４）鹿の鳴き声が聞こえるのを待ち続ける間、虚しく時を過ごしてよいだ

ろうか。いや無駄にするのはよくない、と思って、あるがままのけしきを（歌

に）詠むと、

（庭を見ると）先が色づいて枯れた草葉は残らず露が置いて、（空を見上げると）清らかに澄む月は寒々しい。更けてしまったこの夜は。　　　玄阿

　そうしているうちに、山の頂上のしなやかに曲がっているあたりから、ひとつながりにとても近く（感じられるように鹿が）見事に鳴いた。

清らかに澄みまさる月はあるけれども鹿の音をはっきりと聞くことはうれしいことだったなあ。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　重延

また三度、くり返し鳴いている様子は、とても興趣があることよ。